

『漢書抄』「高后紀」と「文帝紀」における

『新刊全相平話前漢書統集』の長文引用部分に対する考察

菅原 尚樹

はじめに

『漢書抄』とは、『漢書』を講義する際の手控えとして、『漢書』の記載を抜き書きして成った書籍である。構成は第一冊から第三冊が「列伝抄」、第四冊から第六冊が「帝紀抄」となっている。小論の考察対象である「高后紀」は第四冊に、「文帝紀」は第五冊に収められている。大塚光信氏によると、両「帝紀抄」を抄写したのは、道号を景徐（一四四〇～一五一一）という五山の禅僧である。景徐が抄写したのは、列伝抄の一部と「帝紀抄」とされ、「帝紀抄」の原本は、抄出本として、景徐により明応（一四九二～一五〇一）ごろに書かれたとされる¹。現存する『漢書抄』「帝紀抄」は、景徐抄の原本を、大永三～四（一五二三～二四）年ごろに清原宣賢が筆写したものである。

『新刊全相平話前漢書統集』（以下『前漢書統集』と略称する）とは、元の至治年間（一三二一～二三）に刊行されたと考えられている「全相平話」五種のうちの一種である。前漢の歴史を物語る通俗的な白話作品であり、楚漢戦争の末に劉邦が項羽を滅ぼす場面から筆を起こし、文帝の時代までを描いている。しかし、その内容は正史『漢書』と異なる部分が多い。また借用字や誤字が散見され、文章として整っていないため、やや読みにくい作品となっている。

『漢書抄』『帝紀抄』のなかでも、「高后紀」と「文帝紀」には『前漢書統集』の文章が引用してある。これを明らかにしたのは、長尾直茂氏である。⁽²⁾「高后紀」(表紙に「呂后紀」と記す)には、引用を明示する箇所がない。一方の「文帝紀」には、15丁ウラに「平話漢書云」とあり、以下の文章が『前漢書統集』からの引用であることが明示されている。長尾氏は、『漢書抄』『高后紀』と「文帝紀」が『前漢書統集』を引用している箇所を対照表として掲げ、両「帝紀抄」の引用は節略が過ぎる点と、標点に誤りがある点を指摘している。ただし、長尾論文は、両「帝紀抄」に『前漢書統集』を引用したのは誰かという点に紙幅が割かれており、引用部分に対する考察の余地が残っていると考えられる。

小論は、『漢書抄』の「高后紀」と「文帝紀」が、『前漢書統集』からどのような部分を引用しているか考察することを目的とする。とくに長文を引用している部分に焦点を当てて、どのような話柄が取り込まれているのか明らかにしたい。「高后紀」と「文帝紀」の丁数を表す際、丁のウラを「ウ」、丁のオモテを「オ」と記す。⁽³⁾両「帝紀抄」の原文は標点符号として「、」のみを用いており、原文の引用はそれに従う。

一 『漢書抄』『帝紀』における引用形態

『漢書抄』を通覧すると、「○云」の形で書籍が多数引用されている。あるいは書籍に注釈を施した者の発言が「○曰」「○云」「○謂」の形で記述されている。小論の考察対象である『漢書抄』『高后紀』は、第四冊の19丁オより27丁ウにわたっており、『前漢書統集』が引用される24丁オ以前には、典拠を明示したうえで各書の文ないし語句が引用してある。⁽⁴⁾被引用書は、「史ニハ」「史ニ」を含めた『史記』が最多である。19丁オの書き付けを例にとると、次のように記してある。漢字の左下に返り点を付しており、「二」は二点、「一」は一点、「レ」はレ点を示す。

【資料一】

史記ニハ高祖ノ微時ノ妃也トアリ、漢書音義曰、諱雉、呂后ノ姉ヲハ、長姁ト云フ、注姁、許于反、史ニ、太后遂断クナテニ
 戚夫人手足ヌキ、去眼輝フスヘテ耳、飲瘖藥シメテ、使居メテ厠ヲラ中カハヤノニ、命曰ナツケテ人甕ト、云々、

「史記ニハ」から「妃也トアリ」までの記述は、『史記』卷九・呂后本紀の「呂太后者、高祖微時妃也」が該当する。⁽⁵⁾「漢書音義曰、諱雉」の一文は、「高祖微時妃也」に注として付された裴駰『史記集解』に引く「漢書音義曰、諱雉」が該当する。「呂后ノ姉ヲハ」から「許于反」までは『史記』に記載がなく、『漢書』卷三・高后紀に見える。「高皇后呂氏」に付された顔師古の注に「姁音許于反」とある。「史ニ」以降の一文は、『史記』卷九・呂太后本紀からの引用であるが、同様の文は『史記抄』第六冊・呂后本紀・68丁ウゝオにも見える。

『史記抄』とは、五山の禪僧である桃源瑞仙（一四三〇〜八九）が、口語を用いて『史記』の講義に対する注釈を施したものである。大塚光信氏の『漢書抄』の解説によると、「高后紀」と「文帝紀」を含む『漢書抄』『帝紀抄』には、『史記抄』の抄記を抜き書きしている箇所があるとす。⁽⁶⁾大塚氏と長尾直茂氏の論考には、『史記抄』と『漢書抄』の関係を示す資料が掲げてある。⁽⁷⁾その資料により講義の継承をまとめると、次の通りとなる。桃源は先学の竺雲等運から、『漢書』帝紀から列伝四十三までの講義を受けて聞書を作った。⁽⁸⁾景徐は『漢書』を伝授していたが、講義は「帝紀」に止まり、「帝紀抄」を著した。その際に用いたのが桃源『史記抄』である。⁽⁹⁾

先行研究が挙げる資料のなかでも、月舟寿桂「漢水余波序」には、『漢書抄』と『史記抄』の関係を表す箇所が見える。そこに「惜しいことに講義は帝紀までで終わった。（景徐）翁は帝紀抄を著す際に、すべて桃（源）老の（司馬）遷の史（記）の抄を用いた（所惜其講唯止於帝紀。翁著帝紀抄、皆用桃老遷史之抄）」とある。

景徐は「帝紀抄」を成すにあたり、桃源の『史記抄』を用いたことになる。してみると、『漢書抄』『帝紀抄』を理解するうえで、『史記抄』の記述を参照する必要がある生じよう。そこで次に、【資料一】に該当する『史記』卷九・呂后本紀の記載

とともに、比較対象として『史記抄』第六冊・呂后本紀・68丁ウの記述を挙げてみたい。⁽¹⁰⁾

【資料二】

『史記』…呂后最怨戚夫人及其子趙王、廼令永巷囚戚夫人、而召趙王。(中略)太后遂斷戚夫人手足、去眼、燂耳、飲瘖藥、使居廁中、命曰人彘。

『史記抄』…太后遂斷戚夫人手足去眼燂耳飲瘖藥使居廁中命曰人彘カウセラレテモマツレナキイノチハ死ニモハテヌ歟瘖藥ヲ飲シムト云ハソ

【資料一】に挙げた「高后紀」には、『史記』の原文に返り点と読みがな、送りがなが付してある。また原文とともに、裴駰『史記集解』の注と、顔師古による『漢書』の注が引用してある。一方、【資料二】の『史記抄』には、『史記』の原文を掲げたのち、「カウセラレテモマツレナキイノチハ死ニモハテヌ歟」と寸評が付してある。寸評の有無が【資料一】『漢書抄』「高后紀」と【資料二】『史記抄』の異同箇所である。注釈者の寸評としては、「高后紀」にも、たとえば20丁ウに「師無鐘鼓云」「予謂」、21丁ウ・22丁ウに「師古曰」とある。それらはいずれも19丁オから24丁オの前半部に見え、『前漢書統集』が引用してある24丁オの中盤以降になると、「高后紀」中に寸評は記されない。記述のほとんどが『前漢書統集』からの引用になっている。⁽¹¹⁾

『漢書抄』第五冊「文帝紀」は、1丁から16丁オにわたる長文である。『前漢書統集』の引用は15丁ウに「平話漢書云」と表記されて以降、16丁オの最後に及ぶ。1丁オから15丁ウまでに引用される書目は「高后紀」を大幅に上回る。⁽¹²⁾「文帝紀」の引用から一例を挙げると、1丁オに「孝文皇帝 史ノ注ニ、漢書音義曰、諱恒、此注ワルウセハ、諱ハ恒ノ之字ヲ曰フレ常ト可読ソ」とある。「史ノ注ニ」以下は、『史記』卷一〇・孝文本紀の「孝文皇帝」に付された注に見え、裴駰の『史記集解』に「漢書音義曰、諱恒」と引く箇所が該当する。右の書き付けであると、後半部も『史記』の注からの引用と錯覚する

が、該当するのは、『漢書』卷四・文帝紀注に引く荀悦の注である。「孝文皇帝」の下に注が付され、「諱恒之字曰常」とある。¹³「文帝紀」の一文は、『資料一』に挙げた「高后紀」と同様に、『史記』と『漢書』の記載を併せて引用しているのである。

「文帝紀」に『史記』からの引用が多いのは「高后紀」と同様であるが、『史記抄』からの引用も増加している。また「高后紀」に比べて『漢書』からの引用が目立つ。それ以上に、「文帝紀」には多様な書籍が引用してある点が注目される。経書（『左伝』『周礼』等）、史書（『通鑑』）、韻書（『玉篇』『広韻』等）、字書（『説文』）、辞書（『広雅』）のほかに、『楚辞』や司馬相如の「子虚賦」が引用してある。引用する史書のなかには、原書十巻のうち二巻のみ現存する、唐の蘇鶚撰『蘇鶚演義』も見える。¹⁴

各種書籍の引用に続いて、『漢書抄』『文帝紀』は、15丁ウから16丁オにわたり『前漢書統集』の叙述を引用している。ある。ひとつの書籍からかくも大量の文章を引用しているのは、「文帝紀」の被引用書のなかでも『前漢書統集』のみである。「文帝紀」と同様に、「高后紀」の最後にも『前漢書統集』の原文が引用してある。

長尾直茂氏は、『漢書抄』の両「帝紀抄」のかかる引用態度より引用者を推定している。¹⁵所説をまとめると次の通りである。

景徐が先学の竺雲等運や綿谷周衢の講席で聞いたか、口伝えて教えられたかして、『前漢書統集』の存在を知り、『漢書抄』『帝紀』に書き付けた可能性が想定される。しかし、竺雲講義とされる『漢書抄』『列伝抄』第一冊と、綿谷講義、景徐聞書とされる『漢書抄』『列伝抄』第二冊には、ともに『前漢書統集』が引用されていない。『漢書抄』『列伝抄』第三冊は、景徐による抄出本であり、竺雲や綿谷といった先学の言を書き付けているが、『前漢書統集』を引用していない。月舟「漢水余波序」によると、景徐『漢書抄』『帝紀』は桃源『史記抄』を用いていることになるが、『史記抄』は『前漢書統集』を引用していない。景徐の『漢書』の講義を聴聞した月舟が著した『史記幻雲抄』にも『前漢書統

集』を引用している痕跡はない。

以上の根拠を基に、長尾氏は『前漢書統集』の引用者を景徐と推定している。

筆者も『史記抄』全篇と、「高后紀」「文帝紀」以外の『漢書抄』の記述を閲したが、『前漢書統集』の引用は見られなかった。『史記幻雲抄』に閲しても、「高后紀」と「文帝紀」には『前漢書統集』が引用されていないことを確認した。⁽¹⁶⁾長尾氏の推定に異を唱える根拠を見出せないことから、小論では長尾氏の推定に従い、『前漢書統集』の引用者を景徐に比定し論を進める。

景徐は『漢書抄』『高后紀』と「文帝紀」を記述する際、様々な書籍を引用した最後に、白話作品『前漢書統集』の叙述を引いたことになる。経史子集のいずれにも含まれない白話作品を、両「帝紀抄」はどのように引用しているのであろうか。

二 『漢書抄』『帝紀抄』における『前漢書統集』の長文引用部分

本節では、史書の記載と『前漢書統集』の叙述、『漢書抄』『高后紀』と「文帝紀」における『前漢書統集』の引用部分を比較し、内容を検討する。引用する景徐抄「高后紀」と「文帝紀」の記述が、現存する唯一の版本である内閣文庫所蔵『前漢書統集』の叙述を用いているとの確証はない。今は散逸してしまった別のテキストに拠った可能性も考えられるため、内容を比較するうえで、現存する『前漢書統集』を用いることに懸念が残る。とはいえ、比較検討により、両「帝紀抄」の記述が史書の記載ではなく、『前漢書統集』の叙述を引用している可能性の一端を提示できよう。また、本邦の書籍が、『前漢書統集』という白話作品をどのように受容しているのか、その一側面を知ることができると考えられる。そこで三書の内容を比較検討していくこととしたい。

検討対象とする史書には『漢書』を取り上げる。前節に挙げた通り、景徐抄「帝紀抄」は、桃源『史記抄』を用いて成っている。この点を考慮すると、比較対象として取り上げる史書には、『史記抄』の抄写対象である『史記』がふさわしいと考えられる。ただし、本節に扱う「高后紀」と「文帝紀」の『前漢書統集』引用部分が、『史記抄』の記載によつて確証はなく、加えて『前漢書統集』の話柄が『史記』の記載に基づいて書かれたと断言することもできない。そこで『前漢書統集』と『漢書抄』が対象とする時代の歴史書である『漢書』を取り上げることとしたい。

『漢書』の記載を引用する際、『前漢書統集』の叙述と『漢書抄』『高后紀』『文帝紀』の記述に係する文に傍線を付す。『前漢書統集』の叙述を引用文するにあたっては、紙幅の都合により逐語訳ではなく大意を付すこととする。「高后紀」「文帝紀」の引用部分の内容については、対応する『前漢書統集』の略述箇所を参照されたい。

「高后紀」「文帝紀」の引用箇所を明示するために、『前漢書統集』の被引用文を太字のゴチック体で示す。掲出にあつては、基本的に鍾兆華著『元刊全相平話五種校注』（巴蜀書社、一九九〇年）の標点に従うが、文字の異同にかかわる箇所は標点を改める。

まずは、呂后が劉肥を長安におびき出し殺そうとする場面を見てみよう。

【資料三】

『漢書』卷三八・高五王伝に引く劉肥の伝

孝惠二年、入朝。帝与齐王燕飲太后前、置齐王上坐、如家人礼。太后怒、廼令人酌兩卮酖置前、令齐王為寿。齐王起、帝亦起、欲俱為寿。太后恐、自起反卮。齐王怪之、因不敢飲、陽醉去。（孝惠二年、入朝す。帝 齐王と太后の前に燕飲するに、齐王を上坐に置くこと、家人の礼のごとし。太后怒り、廼ち人をして兩つの卮に酖を酌みて前に置かしめ、齐王をして寿を為さしむ。齐王起つに、帝も亦た起ち、俱に寿を為さんと欲す。太后恐れ、自ら起ちて卮を反す。齐王

之を怪しみ、因りて敢えて飲まず、陽り酔いて去る。）

『前漢書統集』卷中・9葉a

劉肥見帝。礼畢、同飲数盃。後、太后軫身起、令宮監暗將到鳩酒。惠帝疑惑。太后举盞与劉肥。、、接盞、与惠帝換盞。惠帝举盞欲飲。太后与吕胥扶耳懊悔、大恨劉肥。惠帝見酒色其惡、遂將酒奠上蒼。落磚、火焰三尺。惠帝便起、携劉肥手至於殿前、弟兄二人抱頭而哭、惠帝言、哥、莫去青州、只於長安伴寡人住国。劉肥緊辭、要去青州。惠帝与劉肥合盒子為勘同、各收一扇。如寡人宣皇兄時、將此一扇、勘合相同為准、如無、乃詐也。就便斬使、封頭見朕。言訖、劉肥辭帝出朝去了。（太后は宦官に命じ、鳩毒入りの酒を盃に注がせ、盃を劉肥に渡した。劉肥が酒を惠帝に渡すと、惠帝は色が悪いのを見て、酒で天を祀った。床に酒が落ちると、三尺の炎が揚がった。惠帝は劉肥の手を取り宮殿の前にやってくる、二人は頭を抱え声を放って泣いた。惠帝は長安に留まるよう求めるが、劉肥は固辞し領地の青州に行くことにした。惠帝は劉肥と小箱の蓋を割符とし、一半ずつを収めた。惠帝が劉肥を招来する際には割符を証にすることを約し、劉肥は惠帝のもとを辞去した。）

『漢書』の傍線箇所には、呂后が劉肥を毒殺しようとする記載が見える。『前漢書統集』はその記載に次の三つの描写を加えている。一つ目は、酒の色を見た惠帝が疑念を催し、その酒で天を祀る（惠帝見酒色其惡、遂將酒奠上蒼）描写である。二つ目は、地に落ちた酒から炎が揚がったのを見て、惠帝と劉肥が頭を抱えて泣く（落磚、火焰三尺。惠帝便起、携劉肥手至於殿前、弟兄二人抱頭而哭）描写である。三つ目は、帰国しようとする劉肥に惠帝が割符を与える（劉肥緊辭、要去青州。惠帝与劉肥合盒子為勘同、各收一扇）描写である。『前漢書統集』は、毒殺されようとする惠帝と劉肥の行動を劇的に描写し、『漢書』の記載とは異なる一場面を叙述しているのである。

【資料三】の『前漢書統集』の叙述から、「高后紀」は次の二文を引用している。

【資料四】

『漢書抄』 高后紀・24丁ウ

劉肥惠帝見酒□甚惡、遂將酒奠^テ上蒼^ニ、落磚火焰三尺、云々 惠帝与劉肥合盒子為勸、同各收一扇、云々

(□□は空格を表している。以下も同じ。)

「高后紀」が記しているのは、惠帝が酒で天を祀り炎が揚がる一文と、惠帝と劉肥がそれぞれ割符を収める一文である。

【資料三】に挙げた『漢書』の傍線箇所に関して、『前漢書統集』の叙述を見ると、始めから「太后は呂胥と非常に悔しがり、劉肥をたいそう恨んだ（太后与呂胥抉耳懊悔、大恨劉肥）」までは、『漢書』と同内容である。呂后が劉肥を毒殺しようとする記事は、『漢書抄』第一冊・列伝抄・18丁オウウに記述がある。⁽¹⁷⁾【資料三】『漢書』の内容は、『漢書抄』第四冊「高后紀」以前にすでに記述されていることになる。

劉肥の故事に関して、「高后紀」が【資料四】に挙げた二文のみを『前漢書統集』から引用しているのは、それらが来源を『漢書』に持たず、『漢書抄』第一冊・18丁オウウに見える劉肥の記述と重複しないからではなからうか。当該場面にかかわる異説として、「高后紀」は『前漢書統集』の叙述から二文を引用したと推察される。

次も、『漢書』に見える記載を『前漢書統集』が変更して叙述し、「高后紀」がその叙述を引用している箇所である。

【資料五】

『漢書』 卷三八・高五王伝に引く劉友の伝

(劉) 友以諸呂女為后、不愛、愛它姫。諸呂女怒去、讒之於太后曰、王曰、呂氏安得王。太后百歳後、吾必擊之。(…)
(劉) 友 諸呂の女を以て后と為せども、愛せず、它の姫を愛づ。諸呂の女怒りて去り、之を太后に讒りて曰く、「王曰く、『呂氏安くんぞ王たるを得んや。太后百歳の後、吾れ必ず之を撃たん。』」と。(…)

『前漢書統集』 卷下・2葉b～3葉a

話分兩頭。劉友至於晉国平州、即日升殿、曰、想呂后薄倖、散呂女為妻、勅令將前妻限十日休了、不要見面。正嘆之不足、悶、而不悅、有前妃子至、見劉友不悅、問之、大王不悅、何亦憂之。劉友不語。再問曰、劉友具說前事。妃子大驚、泣而告曰、夫婦、人之大倫、生則同室、死則同穴、豈可一旦分飛離別。大王思之。妃子又曰、妾於後花園中花陰之下取一土穴、妾於彼避之。大王教使命將書与俺父親、取我回去、如何。劉友泣而言之、是也。妃子藏於後園中避之。於時、呂女閑步至於後園、見一小孩兒耍。呂女問曰、您是誰家小的。小兒曰、我是劉友的兒。呂女再問、您母親在於何處。小兒指土穴中、引呂女至於穴口。小兒叫母、即出。呂女親手揪妃子髮、至於殿上、呂女曰、劉友知罪麼。爾一者負我、二者違了宣命。劉友不語、泣而勸之。呂女惡責劉友、大怒曰、拼吾命矣。將呂女痛傷數拳。呂女大哭、要告太后。(帰国した劉友は、宮殿に来ると、呂氏の娘を娶るため妻を離縁せよとの命令を思い、嘆いても嘆き足りなかつた。そこへやってきた妃は、劉友にどうして憂いているのか尋ねたが、返事がない。再び尋ねると、劉友はいきさつを詳しく話した。離縁を承知しない妃は、裏の花園のなかに穴を掘り身を隠す。劉友の妻となった呂氏の娘があるとき花園にやってくると、小さな子が遊んでるところに出くわした。どこの子か尋ねると、劉友の子だと言う。母親はどこるかさらに尋ねると、穴を指さした。劉友の子が呼ぶと、離縁したはずの前の妃が現れた。呂氏の娘は前の妃の髪をつかみ穴から引き出すと、劉友の前に連れ出し罪を詰った。劉友はたいそう怒り、「我が命に替えても」と呂氏の娘を打擲した。呂氏の娘は呂后に訴えることとした。)

『漢書抄』 高后紀・25丁ウ～26丁オ

劉友至於晉国平州、云々 前妃子至、云々 劉友具說云々、妃子又曰、妾於後花園中花陰之下、取一土穴、妾於彼□之、云々 時呂女閑步至於後園、見一小孩兒耍呂女問曰、誰家小兒、曰、我是劉友的兒、呂女再問您母、云々 小兒指土穴中、云々 小兒叫母、即出、呂女親手揪妃子髮、至於殿上、云々 將呂女痛傷數拳、呂女大哭、云々

『漢書』の傍線箇所には「友諸呂の女を以て后と為せども、愛せず、它の姫を愛づ。諸呂の女怒りて去り、之を太后に讒りて曰く（友以諸呂女爲后、不愛、愛它姫。諸呂女怒去、讒之於太后曰）」とある。『前漢書統集』は、『漢書』の「它姫」を替えて、劉友の前妻を登場させている。夫妻は呂后の命に背き、呂氏の娘を騙す。ところが、実の子に呼ばれて前妻が姿を現し、呂氏の娘の怒りを買う。詰られた劉友は怒り、呂氏の娘を打擲するのである。『漢書』の簡潔な二三字に対して、『前漢書統集』では「劉友至於晋国平州」から「呂女大哭、要告太后」にわたる三〇五字を用い、劉友と呂氏の娘の関係が破綻に至る様が詳述してある。そこには、穴に身を隠しても劉友のもとを離れまいとする妻が、内実を知らない実の子に呼ばれ、呂氏の娘の前に姿を現す場面が含まれる。「高后紀」は、『漢書』の記載を発展させて『前漢書統集』が詳述している部分を、断続的ながら引用しているのである。

劉友は【資料五】に続く場面で絶食を強いられる。

【資料六】

『漢書』卷三八・高五王伝に引く劉友の伝

太后怒、以故召趙王。趙王至、置邸不見、令衛圜守之、不得食。（中略）趙王餓、乃歌曰、（中略）遂幽死。（太后怒り、故を以て趙王を召す。趙王至るに、邸に置きて見えず、衛圜をして之を守り、食らうを得ざらしむ。（中略）趙王餓え、乃ち歌いて曰く、（中略）遂に幽死す。）

『前漢書統集』卷下・3葉a

即日、呂女与使命持書見太后、使至長安見太后。、、看其書、復差使宣劉友・妃子・呂女至。見太后、、、曰、劉友、爾敢違命。將妃子対面而斬首。劉友悲泣而告太后、、、免死、將劉友冷宮後面三間大房、鎖於里面、休与飲膳。左右人

將劉友鎖於房內、十日無食、餓的体如經紙、將糊窓紙食之尽矣、前後餓得半似人半似鬼。看、至死、太后至此、使左右人開門視之、笑曰、我兒多敢肚中餒也。喚左右人將茶一盞、与劉友食之。劉友見茶湯、兩眼争開、就宮人手內奪去食之。太后笑曰、我兒為甚急飲、怕肚中停宿食。劉友托盞、不能放下、仰面而倒於堦下、即時而死。有詩為証。詩曰、

(中略) 太后使左右將劉友尸首後花園內埋訖。(呂后は) 前の妃を劉友の目の前で殺すことにした。劉友が泣訴すると、呂后は死を免じる代償として、劉友を冷宮の裏にある部屋に入れ、施錠して飲食物を与えないことにした。十日の間食事しない劉友は、身体が黄色いおふだ紙のように黄色く痩せ、糊付けした窓紙を食べ尽くし、半死半生までに痩せた。見る間に死のうとしていると、呂后がやってきて、その様を見て笑った。「我が子はおそらく飢えているだろう」と言い、従者に茶を与えるよう命じた。劉友は茶を見ると、両目を見開き、宮女の手から奪って口に持った。呂后は、「なぜ急いで飲むのじゃ、消化不良を起こすぞ」と笑った。劉友は茶碗を持ったまま、天を仰いできざはしの下に倒れ、すぐに死んだ。」

『漢書抄』 高后紀・26丁オ

即日呂女与使命持書見太后云々、將妃子対面而斬首、劉友悲泣而告太后、免死、將劉友冷宮後而三間大房、鎖於裏面、仏与飲饘、云々の体如經紙、將糊窓紙食之尽矣、云々半似人、半似鬼、看、至死、太后笑曰、云々將茶一盞、与劉友見茶湯、兩眼争完、就宮人手内、奪盞食之、云々劉友托盞、不能敢下、仰面而搗於堦前、即時而死、太后使左右將劉友尸首後園內埋訖、云々

『漢書』の傍線箇所には「衛圉をして之を守り、食らうを得ざらしむ(令衛圉守之、不得食)」と「趙王餓え(趙王餓)」とある。『漢書』の傍線箇所に記載されている簡潔な二六字に対して、『前漢書統集』は劉友が餓え死に至る様を、「即日」から「即時而死」までの二一六字にわたり詳述している。劉友は「餓えた体はおふだ紙のように黄色くなり、糊付けした窓の紙を食べ尽くすと、それから半死半生までに餓(餓的体如經紙、將糊窓紙食之尽矣、前後餓得半似人半似鬼)」えて、「見

る間に死のうとしている（看、至死）」ほどに痩せ衰える。呂后が茶を与えると、劉友は「両目をクワツ見開き、宮人の手から奪って食べ（両眼争開、就宮人手内奪去食之）」る。その様を見て、呂后が「笑」と叙述される。かかる叙述は、『漢書抄』第一冊・列伝抄・18丁ウの劉友に関する記述に引用されていない。そこには『前漢書統集』と同内容の記述も見えない。¹⁸⁾

『前漢書統集』は、『資料五』と『資料六』の部分を2葉aから3葉aに跨って叙述している。この場面には、『漢書』の記載には見えない、呂后の嗜虐性を表す様子が加えられている。『漢書抄』は、第一冊の劉友の列伝ではなく第四冊の高后紀に、劉友が呂后に絶食を強いられ飢えて死に至る一連の話柄を、断続的ながらも一〇行にわたり引用しているのである。

次に、「文帝紀」が、文帝の出生に関する文章を『前漢書統集』から大量に引用している部分を挙げる。まずは、文帝の母となる薄姫が劉邦の妻となる経緯を記した部分である。

【資料七】

『漢書』卷九七上・外戚伝に引く薄姫の伝

高祖薄姫、文帝母也。父呉人、秦時、与故魏王宗家女魏媼通、生薄姫。而薄姫父死山陰、因葬焉。及諸侯畔秦、魏豹立為王、而魏媼内其女於魏宮。許負相薄姫、当生天子。是時項羽方与漢王相距滎陽、天下未有所定。豹初与漢擊楚、及聞許負言、心喜、因背漢而中立、与楚連和。漢使曹參等虜魏王豹、以其国為郡。而薄姫輸織室。豹已死、漢王入織室見薄姫、有詔内後宮。歳余不得幸。（高祖の薄姫、文帝の母なり。父は呉の人、秦の時、故の魏王の宗家の女魏媼と通じ、薄姫を生む。而して薄姫の父山陰に死し、因りて焉に葬むる。諸侯秦に畔くに及び、魏豹立ちて王と為るに、魏媼其の女を魏の宮に内る。許負薄姫を相て、当に天子を生むべしとす。是の時項羽方に漢王と滎陽に相い距み、天下未だ定まる所有らず。豹初め漢と楚を撃てども、許負の言を聞くに及びて、心喜び、因りて漢に背き中立し、楚と連和す。

漢曹參等をして魏王豹を虜え、其の国を以て郡と為し、而して薄姫織室に輸さしむ。豹已に死し、漢王織室に入りて薄姫を見るに、詔有りて後宮に内る。歳余幸を得ず。）

『前漢書統集』 卷下・9葉b～10葉a

有河東魏豹、輔佐西楚王、関東八伯諸侯、第一箇英雄、天下名伝小霸王。元受項王手將、後帰漢、相高祖、発於本国、至河中府。有門客許負參見魏豹、請相見、茶酒畢。閑話間、有薄姫夫人於簷外笑語。許負聞之、問豹曰、甚人笑語也。豹曰、乃吾妻也。許負曰、是一人妻也、注有君道。許負出宅相別。魏豹曰、負相我妻薄姫、君之道如何。周叔曰、大王豈是真天子。皆是侯相之命、不可思之。臨大節而不可奪也。豹不従周叔諫、擺河而造反。漢皇知、差韓信夜渡甕機而征、一擒豹而斬之、虜薄姫進与高祖、納為第三妻、勅令往少陽宮。（河東には魏豹がおり、西楚王を補佐し、関東八伯諸侯のなかでも、第一の英雄として、小霸王という名が天下に伝わっていた。もともと項王麾下の将であったが、後に漢に帰属し、高祖を補佐することとなると、本国を出発し、河中府にやってきた。食客である許負が魏豹に目通りすると、魏豹は人相を見てくれるよう頼み、茶や酒を喫し終えた。とりとめのない話をしていると、薄姫が簷の外で笑って話していた。許負はそれを聞き、「誰が笑って話しているのですか」と尋ねた。魏豹は「私の妻に相違ない」と言った。許負は、「天子の妻女です、（あなたは）君子となる運命です」と言った。魏豹はその言葉を真に受け、漢に造反した。しかし魏豹は捕らえられて殺された。薄姫も捕らえられたが、高祖の三番目の妻として迎えられ、少陽宮に行くよう命じられた。）

『漢書抄』 文帝紀・15丁ウ

許負參見魏豹、請相見、茶酒畢、閑話間、有薄姫夫人於簷外笑語、許負聞之、問豹曰、甚人笑語也、豹曰乃吾妻也、許負曰是一人妻也、云々擒豹而斬之、虜薄姫進与、高祖納為第三妻、勅令住少陽宮、

『漢書』には、魏豹は以前に漢とともに楚を攻めていたものの、薄姫の人相を見た許負の言葉「当に天子を生むべし（当

生天子」を聞き、「心喜（心喜）」び、「因りて漢に背き中立し、楚と連和す（因背漢而中立、与楚連和）」とある。『前漢書統集』は『漢書』と同様に、食客として許負を登場させ、魏豹が高祖に背く様を叙述している。「文帝紀」は『前漢書統集』の叙述を引用し、薄姫に天子の妻となる分があることを示し、高祖の三番目の妻に納れられたと記述している。

【資料七】に続く部分には、『前漢書統集』が『漢書』の記載を発展させた叙述が見える。「文帝紀」は『前漢書統集』の文章を引用している。次の通りである。

【資料八】

『漢書』卷九七上・外戚伝に引く薄姫の伝

始姫少時、与管夫人・趙子兒相愛、約曰、先貴母相忘。已而管夫人・趙子兒先幸漢王。漢王四年、坐河南成臯靈台、此兩美人侍、相与笑薄姫初時約。漢王問其故。兩人俱以実告。漢王心慘然憐薄姫、是日召欲幸之。対曰、昨暮、夢龍抱妾胸。上曰、是貴徴也、吾為汝成之。遂幸有身。歳中生文帝。年八歳、立為代王。（始め姫少き時、管夫人・趙子兒と相い愛で、約して曰く、「先んじて貴となれども相い忘ること母かれ」と。已にして管夫人・趙子兒先に漢王に幸す。漢王四年、河南成臯の靈台に坐するに、此の兩りの美人侍り、相い与に薄姫初めの時約するを笑う。漢王其の故を問う。兩人俱に実を以て告ぐ。漢王心に慘然として薄姫を憐れみ、是の日召して之に幸せんと欲す。対えて曰く、「昨暮、龍妾が胸に抱るを夢みる」と。上曰く、「是れ貴徴なり、吾れ汝の為に之を成さん」と。遂に幸して身ごもる有り。歳中文帝を生む。年八歳、立ちて代王と為る。）

『前漢書統集』卷下・10葉a

薄姫腹懷有孕、呂后生嫉妬、怕生太子。臨時、呂后教喚穩婆守生。呂后号令道、穩婆、是女兒、留者、太子者、隨即換了、賜金千両、不從我者、斬之。隨時分免、報知呂后、々、看之笑、是一怪物、没眉没眼、可似一塊血肉。穩婆鬧中抱

太子出得宮門、至於本宅、欲壞太子。聞空中喝一声不得無礼。道、三世人主、無得損壞。穩婆本家哺養。呂后将怪物進与高祖。、見之大怒、貶薄姬北梁州、居止薄辛处。劉安抱太子上梁州。薄姬欲見太子、一似高祖之形。夫人大喜、賞劉安白金千兩、權為恩養。後太子年長十五歲、身長八尺、面如白玉、手垂過膝、兩耳垂肩、龍睛鳳目。當時要往長安認高祖。此時認了、高祖不信。太子具說母之言、從前說一遍。高祖人喜、即日封太子為北大王、却還梁州、与薄姬同治軍事至今。(薄姬が妊娠すると、呂后は嫉妬し、太子が生まれることを恐れた。すぐさま呂后は取り上げ婆を呼び世話をさせることとした。呂后は、女兒はそのままにし、太子はすぐに取り替えるならば金千兩を与えるが、従わなければ斬ると命じた。ほどなく分娩があつたとの報を受け、呂后は嬰兒を見に行き、その姿を見て笑つた。眉も目もない怪物で、まことに血肉のかたまりのようであつた。取り上げ婆は太子を抱えて宮門を出て、自宅にやってくると、太子を殺そうとした。空で「無礼をいたすな」と怒鳴り声がし、続けざま「三世の人主、傷つけてはならぬ」という声があつた。取り上げ婆は自分の家で養育することにした。呂后が怪物を高祖に差し出すと、高祖はそれを見たいそう怒り、薄姬を北梁州に貶斥し、貧しく苦しい生活をさせることとした。劉安が太子を抱いて梁州に向かつた。薄姬は太子に会いたがり、高祖にそっくりであつたので、たいそう喜び、劉安に白金千兩を褒美として与え、ひとまず養育させることにした。それから太子が十五歳に成長すると、身の丈は八尺、白玉のようなかんばせ、手を下げると膝を過ぎ、兩耳は肩に届き、帝王の風貌を備えていた。太子は高祖の下に出向き、これまでの経緯を話すと、高祖は喜び、太子を北大王とした。)

『漢書抄』文帝紀・15丁ウ

薄姬腹懷有孕、呂后生嫉妬、怕生太子、臨時喚穩婆守生、呂后号令、道穩婆、是女兒富者、太子者隨即換了、云々一怪物、没眉没眼、可似一塊血肉、穩婆鬧中抱太子、出得宮門、至於本宅、云々 呂后将怪物、進与高祖、、見之、大怒貶薄姬、云々 劉安抱太子、上梁州与薄姬欲見太子一似高祖之形、云々 太子年長十五歲、身長八尺、面如白玉手、垂

過膝、兩耳垂肩、龍睛鳳目、云々、封太子為北大王、云々

『前漢書統集』は『漢書』の傍線箇所の記事を変更し、薄姫が生んだ太子にまつわる叙述に紙幅を割いている。「文帝紀」における『前漢書統集』引用部分は15丁ウから16丁オに至る。【資料八】の引用部分は15丁ウの全17行のうち6行に及び、「云々」を挟みつつ断続的な引用になっている。ただし、「云々」に挟まれる前後の繋がりには比較的緊密であり、文意を取ることが難しい。文帝の出生譚はおよそ次のようにまとめることができる。怪物然とした容貌で生まれた男児が、実の父から疎んぜられ、その下から追い出される。ところが、男児は成長すると帝王の貌を備えており、ついには太子に封じられ北大王となる。北大王は後に文帝に即位するのである。

『漢書』に見える文帝の出生は、薄姫が腹中に龍が寄り付く夢を見たという前兆が説話的と言える。一方の『前漢書統集』には、目も眉もない肉塊のような子が生まれるとある。皇帝の象徴たる龍との関連で記載される『漢書』に比べると、文帝の出生は怪奇的に叙述されている。とはいえ、『前漢書統集』には、奇怪な容貌で生まれた太子が、成長すると帝王の容貌を備えているという文帝の特異な出生が叙述しており、文帝の出生にかかる異説として意趣に富むと言えよう。史書の記載とは異なる趣向が見て取れることから、「文帝紀」は断続的ながらも、当該部分を大量に引用したと推察されるのである。

以上、『漢書抄』『高后紀』と『文帝紀』が『前漢書統集』の長文を引用している部分を見てきた。引用されている場面を見ると、【資料三】には、呂后の謀略を察知した恵帝と劉肥が涙を流す様が叙述され、【資料五】【資料六】には、呂后の命に背いた劉友が絶食を強いられ死ぬ過程が叙述されている。【資料七】【資料八】には、薄姫の境遇に始まり、文帝が出生するまでが叙述されている。『前漢書統集』の叙述を見ると、『漢書』の記載に来源を持つ箇所を發展させていることがわかる。それらは『史記抄』には引用されておらず、「高后紀」と『文帝紀』がもっぱら引用しているのである。

前節に挙げた通り、月舟「漢水余波序」に「(景徐)翁は帝紀抄を著す際に、すべて桃(源)老の(司馬)遷の史(記)

の抄を用いた」とある。景徐は桃源の『史記抄』を用いて『漢書抄』の「帝紀抄」を著すにあたり、「高后紀」と「文帝紀」には、『前漢書統集』の文章を独自に引用したのである。とりわけ呂後の非情なふるまいに関する叙述は異彩を放っており、史書の記載に比べて面白みのある箇所になっている。それゆえに、景徐は『漢書』の手控えに、異説として『前漢書統集』の叙述を書き付けたと推察されるのである。

『前漢書統集』のなかには、『漢書』の記載を元々の場面ではなく、別の場面に取り込んでいる叙述がある。『漢書抄』の「高后紀」と「文帝紀」はその叙述を引用している。例として二つの場面を見ていこう。まずは、呂后が惠帝崩御を秘匿するために、朝廷の門を閉じる場面である。

【資料九】

『漢書』 該当する記載なし。

『前漢書統集』 卷下・1葉a

却説呂后見惠帝帰天了、令酈商等伏兵内門。第三日、文武来朝、却見内門閉。衆文武内外交鬧、文武甚驚。自帝崩前後六七日、有王陵・陳平商議間、内門緊閉、如之奈何。二人話間、見一人提轡而来、下馬參拜二相、却是樊亢。拜畢、陳平曰、誰如您父子。亢曰、昔日父踏鴻門。若用樊亢、願往之不懼。只此閉九重禁門、只為惠帝、六日不知好弱。樊亢曰、二相看我不踏開此門、誓不為漢臣。有樊亢進歩向前、手揺金環、一脚踏門兩開。又至五門、被亢踏之、三座門開。太后忙問呂胥。急問門、見太后曰、惠帝帰天也。(呂后は惠帝が死んだのを見ると、酈商等に兵士を宮中の内門に潜ませた。内門が閉まっているのを目にすると、王陵と陳平はどうか相談する。そこに馬の轡をとりやってきたものがあった。馬から下りて二人に礼拝したのは、樊亢であった。樊亢はその昔、父である樊噲が鴻門に臨んだことから、もし自分を用いてくれるなら、願ひこそすれ恐れはしない、禁裏の門が閉じているだけだと述べた。樊亢は王陵と陳平に向

かい、門を踏み開かなければ漢の臣ではないと誓いを立てる。樊伉は歩を進めて前進すると、手にかねの環を振るい、片足で門を踏みつけ、門を左右に開く。さらに五門にやってくると、樊伉に踏つけられ、三つの門が開く。呂后は慌て呂嬃に相談すると、呂嬃は恵帝が崩じたことを公表する。）

『漢書抄』高后紀・25丁オ〜ウ

呂氏見恵帝帰天了、令酈商等伏兵内門、云々 見内門閉、云々 王陵陳平商議問、門緊閉如之奈何、二人話問、見一人提轡而来、下馬参拜二相、却是樊亢云々、亢曰、昔日父踏鴻門、若用樊亢、願往之不懼、只此閉九重門、云々 二相看、我不踏開此門、誓不為漢臣、云々 亢進歩向前、手搖金環、一脚踏門、両開、又至五門、被亢踏之、三座門開、云々

当該場面には、皇帝の生死をめぐる呂后と王陵・陳平の駆け引きを通じて、権勢争い的一幕を垣間見ることができ。恵帝の死を秘匿したい呂后に対して、王陵と陳平はその死を探ろうとする。そこに現れるのが樊伉（原文には「樊亢」と表記される）である。登場した樊伉は、「その昔父は鴻門での経験があります。もしも樊伉を用いてくださいますれば、行くことを願いはすれども恐れはいたしません（昔日父踏鴻門。若用樊亢、願往之不懼）」と言う。

樊伉の父である樊噲が劉邦を救うため「鴻門」に駆けつける話柄は、『漢書』卷四一・樊酈滕灌灌斬周伝に引く樊噲の伝に記載がある。¹⁹⁾ 樊噲は項羽の軍営に乗り込み、劉邦を窮地から救い出す。『前漢書統集』に登場する樊伉も父と同様の行動を取り、恵帝の生死を探るために、閉ざされた宮殿に単身突入することを願い出る。その様は、「かねの環を振り、門を蹴り開け（手搖金環、一脚踏門両開）」と叙述される。この樊伉の行動を見ると、『前漢書統集』は『漢書』の一場面を念頭に置きながら、【資料九】の場面を叙述したと推察される。「高后紀」の記述を眺めると、「云々」を除く一一九字のうち、「亢曰」以下樊伉の言動に六四字を費やしている。当該場面の前半は、恵帝の安否を探ろうと、王陵と陳平が相談する内容になっているが、樊伉が登場して以降は、彼が父に倣い、秘匿された恵帝の安否を探らんとする様に筆が費やしてある。樊噲が劉邦を危地から救ったように、樊伉も呂氏が巣くう宮殿に乗り込むことによって、恵帝崩御の公表を誘発することに成功

するのである。

次に挙げるのは、呂後の死の前夜を描く場面である。当該場面は『漢書抄』『帝紀』の引用部分なかでも最長になっており、引用は高后紀・26丁才からウにわたる16行に及ぶ。場面は次の一文に始まる。

【資料一〇】

『史記』 該当する記載なし。

『前漢書統集』 卷下・6葉b～7葉a

思慮中間、近臣奏曰、南鄭褒州韓信丘墳確倒東南一角、裏面有大蛇、身長數丈、傷人性命、斷其駢路。(腹心がないことを考えている呂後に、侍従が次のように告げた。「南鄭褒州にある韓信の墓の一角が崩れ、なから蛇が姿を現しました、体長數丈、人の命を損ない、路を塞いでおります。」)

『漢書抄』 高后紀・26丁才

南鄭褒州韓信丘墳確倒、東南一角裏面、有大蛇、身長數丈、傷人性命、斷其駢路、云々

『前漢書統集』を見ると、侍従が、韓信の墓が崩れてなから現れた大蛇が道を塞ぎ、人の命を損なっていると云う。道を塞ぐ大蛇にまつわり想起されるのは、『漢書』に見える劉邦が道に蛇を斬った故事である²⁰。劉邦が道を塞ぐ蛇を斬り教里進んだのち、後ろから来た者が蛇がいた場所に来ると、老婆が声を上げて泣いていた。その故を尋ねると、老婆は、我が子である白帝の子が蛇に変化していたのを、赤帝の子が殺したために泣いているのだという。この故事は、劉邦が帝位に即く前兆と見なせる。『前漢書統集』の叙述は、『漢書』の劉邦の故事に倣ったものだと考えられる。ただし、劉邦が蛇を斬ったことが帝位に即く前兆となっている『漢書』の記載とは、対照的である。『前漢書統集』では、帝位に即いた劉邦の妻である呂后が、自らの讒言で死に至らしめた韓信の墓から蛇が現れたとの報を受ける。路に蛇が現れるという設定は同様であ

るが、『漢書』がそれを吉兆に描いているのに対して、『前漢書統集』は凶兆として描いているのである。以上に見てきた通り、【資料九】【資料一〇】に挙げた『前漢書統集』の叙述は、『漢書』の元々の記載を、別の場面に取り込んでいる。それにより【資料九】では同工異曲の記述が生み出され、【資料一〇】では対照的な意味内容を描き出すことに成功していると考えられるのである。

むすびにかえて

景徐は『漢書抄』を抄写する際、經史子集に分類される漢籍の語句を、長短交えて引用している。ところが、『漢書抄』のなかでも「高后紀」と「文帝紀」には、両篇の掉尾に、『前漢書統集』の文章を連続あるいは断続的に、比較的まとまった形で大量に引用している。【資料二】と【資料三】は、呂后が劉肥を毒殺しようと企てる場面であり、【資料五】と【資料六】は、呂后により劉友が絶食を強いられたはてに死ぬ場面である。これら四つの場面には、呂后の嗜虐性が表されている。【資料七】【資料八】には、後に帝王となる文帝にまつわる特異な出生譚が叙述してある。上記六つの場面は、『前漢書統集』が『漢書』の記載を発展させて、劇的に詳述している部分と言え、「高后紀」と「文帝紀」は、『前漢書統集』の叙述を略述する形で引用している。【資料九】と【資料一〇】の『前漢書統集』は、史書の記載を典故に持つ叙述になっている。【資料九】の樊伉は、恵帝の生死を探るために閉ざされた宮殿に踏み入る。これは父の樊噲が鴻門において劉邦の窮地を救った故事に倣った叙述であると考えられる。【資料一〇】には、呂后の死の前夜が描かれている。場面は、呂后の讒言によって命を奪われた韓信の墓が崩れ、なかから現れた大蛇が人の命を損なっているという報告に始まる。帝位に即く前兆として、劉邦が白帝の子が変化した蛇を斬った故事に由来する叙述であると考えられる。

『漢書抄』『高后紀』と『文帝紀』が『前漢書統集』の長文を引用している部分を見ると、他の漢籍の引用と異なる状態、

すなわち原文のみを大量に引用し、しかも掉尾に一括して書き付けている。景徐は桃源『史記抄』を用いつつ「帝紀抄」を成すにあたり、「高后紀」と「文帝紀」には、他の漢籍とは一線を画す状態で『前漢書統集』の叙述を引用していると言えらる。内容に着目すると、「高后紀」と「文帝紀」が『前漢書統集』から引用しているのは、呂後の嗜虐性や文帝の特異な出自を表す部分である。それらは史書に片言隻句一致する記載がなく、『史記抄』にも見えない呂后と文帝に関する叙述である。景徐は当該部分を『前漢書統集』から引用することにより、史書の講義の手控えに説話的な要素を付加することを図つたと推察されるのである。

〔付記〕

小論は、科研費 研究活動スタート支援「本邦における「全相平話」の受容に関する研究」（課題番号 25884005）の交付を受けた研究成果の一部である。

注

- (1) 大塚光信編『続抄物資料集成』第一〇巻「解説・索引」（清文堂出版社、一九九二年）の『漢書抄』解説部分、五〇頁参照。
- (2) 長尾直茂「中世禅林における『新刊全相平話前漢書統集』の受容―清家文庫所蔵『漢書抄』への引用をめぐって―」（『漢文学 解釈と研究』第一二輯、汲古書院、二〇一一年）参照。
- (3) 『漢書抄』の底本には、影京都大学附属図書館所蔵清家文庫本（大塚光信編『続抄物資料集成』第四巻、清文堂出版、一九八〇年）を用い、京都大学電子図書館のデジタル画像も参照する（URL: <http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/minds.html>）。『前漢書統集』の底本には、影元刊本（瀧本弘之編『中国古典文学挿画集成』六、遊子館、二〇〇九年）を用いる。なお『前漢書統集』のデジタル画像は、国立公文書館デジタルアーカイブで公開されている（URL: <http://www.digitalarchives.go.jp/>）。
- (4) 引用書目を列挙する。丁のウラとオモテの間を「」で区切り、丁と丁の間を「／」で区切る。19丁オ…「史記ニハ」「漢書音義曰」「史ニ」、ウ…「恵帝紀ノ注ニ」「史ニハ」「史記ニハ」／20丁オ…「史ニハ」「史ニ」「梅抄云」、ウ…「史ニハ」「索隠ハ」／21丁オ…「史ニハ」「史抄云」、ウ…「史ニハ」「百官表云」「風俗通ニ」／22丁オ…「史ノ注ニハ、索隠ハ」「老子経ノ」「史ニ注ソ」、ウ…「漢ハ」「高紀ノ注ニ」「史抄云」「韻書ニハ」「儀礼ニ郷射疏ニ」「士喪礼ニ」「困学ニ」「杜牧詩ニ」／23丁オ…「史ニハ」「史抄云」、ウ…「史ニ」「賛曰」／24丁

オ…『文公綱目書』

- (5) 引用する『史記』と『漢書』の底本は百衲本による。
- (6) 前掲注1大塚氏による解説四一～四八頁参照。
- (7) 前掲注1大塚氏解説二七～二八頁と前掲注2長尾氏論文四一～四二頁参照。
- (8) 『史記抄』第五冊・項羽本紀・6丁オウウの該当箇所に見える。
帝紀ノ第一カラシテ列伝ノ四十三マテハ聴聞シテ聴カキヲシテ置タソ其中ニ二十二カラ二十六マテハ用堂ノ死ナレテ中陰ニ居タホトニ闕所アリサテハ一度モ不闕ソ
- (9) 月舟寿桂「漢水余波序」(『続群書類従』第一三輯上、続群書類従完成会、大洋社、一九三二年所収)の該当箇所に「桃戢化後、景徐翁為門人祥雲屋開席。雲為惠林仍孫、故有此求。予又侍焉、所惜其講唯止於帝紀。翁著帝紀抄、皆用桃老遷史之抄。」とある。
- (10) 『史記抄』の底本は、影京都大学附属図書館所蔵清家文庫本(大塚光信編『抄物資料集成』第一巻、清文堂出版、一九七七年)を用いる。あわせて、前掲注3京都大学電子図書館のデジタル画像も参照する。
- (11) 「高后紀」は、『前漢書統集』の叙述をほぼ漢字のみの羅列によつて抄写しているが、二箇所には読みがなや送りがな、返り点が付している。一箇所目は24丁ウ「奠^テ上蒼^ニ」である。二箇所目は26丁ウ「穴^ニ入^レ城^ニ」である。「奠^ニ上蒼^ニ」「穴^ニ入^レ城^ニ」は、ともに訓読法により、「上蒼^ニ奠^テ」「穴^ニシテ城^ニ入^ル」と読むことを前提とした書き付けと考えられる。そのほか、ふりがなのみを付す箇所として、『漢書抄』高后紀・25丁オ「御駕^キ出^ル獵^ス」、同紀・26丁ウ「排列^シ香果^ヲ羊酒^ヲ、奠^テ祭^ス」、同紀・27丁オ「知^ル此^ノ密^ニ事^ヲ」が挙げられる。「奠^テ」については、右記24丁ウ「上蒼^ニ奠^テ」では「奠」を「まつり」と読んでいるのに対して、26丁ウでは漢字の音「テン」が付してあり、二様の表記になっている。
- (12) 引用書目と篇目の主だったものを列挙する。表記方法は、前掲注4に同様である。1丁ウ…「広雅云」「史ノ注、公羊伝曰」／2丁オ「史ノ注、索隠曰、東觀漢紀」、ウ「尚書ニハ」／3丁オ…「楚辭云」／5丁ウ…「徐広曰、案漢書及五行志」／6丁オ…「史ノ注ニ、索隠曰、漢旧儀」、ウ…「周礼ニハ」「風俗通ニハ」／7丁オ…「通鑑ニハ」「蘇鶚演義曰」「相如子虚賦」「楚辭…文公注云」「広韻」「正義曰」「左伝」、ウ…「句会注」「説文」「玉篇ニハ」／8丁オ…「集覧ニ」、ウ…「王充論衡」「淮南子云」「汲冢竹書」「周礼小宗伯」／9丁オ…「唐書高宗祠五帝、注云」、ウ…「公羊伝注疏ニ」「礼記、王制疏ニハ」／10丁オ…「史ノ注ニハ、索隠曰、戦国策云」「捩風俗通」、ウ…「広韻」「杜詩注ニ」／12丁オ…「礼記、喪服」「儀礼疏」／13丁ウ…「国語ニ」「小爾雅ニハ」「易二篇之策」「前惠紀注」／14丁ウ…「坡詩ニ」
- (13) 『史記抄』第七冊・孝文本紀・1丁オに、「孝文皇帝漢書音義ニハ諱ハ恒トアルソ漢書ノ注ニハ諱恒之字曰常トアルソ」と見える。『漢書抄』『文帝紀』の掲出箇所云う「史ノ注ニ」とは、あるいは『史記』の注ではなく、『史記抄』を指している可能性がある。
- (14) 『四庫全書総目』(清・永瑆等撰、中華書局、一九六五年第一版、一九八七年第四次印刷)巻一一八・子部・雜家類二、一〇一六頁に「蘇氏演義二卷、永樂大典本」とあり、「唐蘇鶚撰」と見える。解説部分に「原書十卷。今掇拾放佚、所得僅此。古書亡失、愈遠愈稀。片羽吉光、弥足珍貴。是固不以多寡論矣」とある。

- (15) 前掲注2長尾氏論文四三〜四四頁参照。
- (16) 市立米沢図書館のデジタルライブラリーに掲載してある『史記幻雲抄』を参看した (URL: <http://www.digitalarchives.go.jp/>)。
- (17) 『漢書抄』第一冊・列伝抄・18丁オには、「高五王第八」と『漢書』の篇名が記してあり、数個の空格の後、「三十八」と『漢書』の巻数が記される。『漢書』本文の抄写部分には「斉悼恵―入^テ朝^ス 置^テ齊^ノ王^ハ兄^{ナリ}恵^帝ハ弟^{ナリ}天子^ノ上^ニ至^テハ兄^也トモ臣^下ソ礼^ハ弟^{ナリ}トモサフハアルマイソ如^家―ハ小^家在家^ノモノ、礼^ノ様^ニサシモノソ反^ス扈^ヲ陽^醉」とある。
- (18) 「趙幽―」から始まる記述中、関係する箇所には「至^レ置[―]令^衛困[―]警^困ヲ、イタソ其^群―自^レ窓[―]ト而^テ饋^ヲハ論^スルソ」ある。
- (19) 該当部分は次の通りである。なお引用部分に「鴻門」の語は見えず、当該語は卷三一・陳勝項籍列伝に引く項羽の伝に、「羽遂入至戲西鴻門」、「明日沛公從百余騎至鴻門」と見える。
- 項羽在戲下、欲攻沛公。沛公從百余騎因項伯面見項羽、謝無有閉關事。項羽既饗軍士、中酒、亞父謀欲殺沛公、令項莊拔劍舞坐中、欲擊沛公。項伯常屏蔽之。時独沛公与張良得入坐、樊噲居營外、聞事急、廼持盾入。初入營、營衛止噲、噲直撞入、立帳下。
- (20) 『漢書』卷一・高紀の該当部分は次の通りである。
- 高祖以亭長為傭送徒驪山、徒多道亡。自度比至皆亡之、到豐西沢中亭、止飲(中略)高祖被酒、夜徑沢中、令一人行前。行前者還報曰、前有大蛇当徑、願還。高祖醉、曰、壯士行、何畏。乃前、拔劍斬蛇。蛇分為兩、道開。行數里、醉因臥。後人來至蛇所、有一老嫗夜哭。人問、嫗何哭。嫗曰、人殺吾子。人曰、嫗子何為見殺。嫗曰、吾子、白帝子也。化為蛇、当道。今者赤帝子斬之。故哭。人乃以嫗為不誠、欲苦之、嫗因忽不見。

【キーワード】

・漢書抄 ・高后紀 ・文帝紀 ・全相平話 ・前漢書統集